

鼠らい菌によるマウス発癌抑制と遅延型 過敏症との関係について

京都大学結核胸部疾患研究所 細菌血清学部

大 岩 弘 治

BCG を始めとして、結核菌、*M. butyricum* その他のミコバクテリウム、或いはコリネバクテリウム、ことに嫌気性のコリネバクテリウム、更には百日咳菌等々、多数の種類細菌に抗腫瘍作用のあることが報告されている。その作用機序は菌によって異なるであろうが、食細胞、網内系細胞の機能亢進が多くの場合に認められ、更に遅延型反応の増強が認められることが多い。

しかし乍ら、ヒトに対して病原性のない鼠らい菌に抗腫瘍性があるか否かについては未だ報告がない。これは多分、本菌による実験的鼠らいの病巣はヒトの「らい腫」らい型に類似して居り、遅延型反応であるレプロミン反応も発現しないことも関係があったかも知れない。

本報告では鼠らいの生菌又は死菌を種々の方法で C3H/He 雌マウスに接種して、その乳癌

の自然発生を抑制できるか否か、又、もし抑制がみられた場合に、それとレプロミン反応との間に何らかの関係はないかについて検討した。

その結果、鼠らい生菌の場合には、種々方法を変えて接種しても、乳癌発生を抑えることはできず、且、レプロミン反応も早期、晩期ともに微弱であった。

しかるに鼠らい加熱死菌を繰返し注射すると、乳癌発生は著しく減少し、又、発生した場合でも対照無処置群に比べて顕著に遅延して発生した。

更にレプロミン反応はことに、晩期において対照無処置群に比べても判然と増強が認められた。

即ち鼠らい死菌頻回注射によるマウス乳癌発生の抑制と、レプロミン反応の増強との間には何らかの関係があると思われる成績を得た。